一　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

暖冬だ、地球温暖化だなどといわれているうちに、二〇年ぶりという大雪に見舞われて、久々に「冬」を思い知らされた。地球全体はたしかに温暖化しているのかもしれないが、温帯にはゲンゼンとして冬が存在していたのである。

考えてみれば、古来地球上には恒常な時代などあったはずがない。毎年、毎年が何らかの形で異常であり、それがフキソクにくり返されていきながら、何万年、何十万年というちに、全体的な気候もスイイしてきたのだろう。今われわれが目にしている温帯の生きものたちは、その中であるときはじっと耐え、あるときはつかのまの繁栄を享受しながら、長い長い年月をしたたかに生きてきたにちがいない。降り積もっていく雪を眺めながらそう思ってみると、それぞれの生き物たちの冬の越しかたがどのようにプログラムされているのかをあらためて考えてしまうのである。

「冬を越す」というと、すぐ頭に浮かぶのは冬眠とか冬ごもりとかいうことばである。しかし誰でも知っているとおり、これはひとつの姿にすぎないし、そのためにもじつに周到なプログラムが組まれているのである。

いつのころからかよくおぼえていないけれど、冬になると、家の中にカメムシという虫が入ってくることが多くなった。部屋のどこかにひそんでいて、暖かい昼には日のあたる窓ガラスを歩いていたりするが、夜になるとまたどこかへ姿を消してしまう。近くにコダチが多い家などでは、年によってずいぶんたくさん入ってきて、ちょっとした話題になったこともある。

要するにこれはカメムシたちの冬越しの営みなのだ。冬が近づいて外が寒くなったので、人家に入りこんできたのである。

けれど冬を越す虫たちは、単に暖かい場所を求めているわけではない。そもそもたえず動きまわっている虫たちには、どこがいつも暖かいかなど、かんたんにはわからないだろう。たとえば、晴れた日の昼にとても暖かい場所は、雨の夜にはかえって寒いかもしれないのだから。その上彼らにとって、体が濡れるのは、冬には大変キケンなことなのだ。もし気温が零下何度かまで下がると、濡れていたら凍ってしまうおそれがあるからだ。昼と夜で温度がはげしく変わるのも困る。何も食べずにいるのだから、昼間日がよくあたって体が温まることは、エネルギー消費という点からすれば、とても迷惑なことなのである。

どうしたら場所をみつけることができるだろうか？　寒さはたちまちにしてやってくるから、場所探しにゆとりはない。冬越しの場所を選ぶプログラムは、きっと驚くほど単純に、しかしきわめて妥当にできているにちがいない。

そんなときすぐ思い出すのは、かつて聞いたテントウムシの話である。

夏の間どこにでもみられるあのテントウムシは、秋の半ばごろてんでに飛び立って、冬を越す場所を探す。彼らが求めるのは、少し高いところにある乾いた物かげである。乾いた場所。それは一般的にいって周りよりは白っぽくみえる。まだそれほど寒いとはいえない晴天の日、テントウムシたちは思い思いに飛びながら、白っぽい色の場所を探す。それはちょっとした小屋の軒先の物かげだったり、立てかけられた古い板のウラガワだったりする。たまたまこういう場所をみつけたテントウムシはそこへもぐりこみ、そこで落ちつく。するとそこへは、一匹、また一匹とテントウムシがやってきて、たちまちのうちに何十匹という集団ができる。それは一種類ではなく、いろいろな種のテントウムシの集団である。

選択のキジュンにされたのは、白っぽい色を手がかりにした乾いた物かげである。その結果として、あまり寒くなく、乾いていて雨もかからず、昼夜の温度差も少ないという、冬越しに適した場所が選ばれることになる。カメムシの場合も同じことであろう。

ただしこういう選択には、まちがいもおこりうる。たとえば人家のカメムシの場合、暖房をつけた人家の中は、しばしば乾燥しすぎるものである。そういうところを選んでしまったカメムシたちは、寒さにこそ遭わないが、乾燥しすぎて、春を待たずに死んでしまうことが多いのだ。

いかに乾いた場所を選んでも、冬に零下何度という寒さになる土地では、虫たちの体が凍るということもある。そういう場合、虫たちは自分で不凍液をつくりだし、凍ってしまわないようにするしくみをもっている。

昔、茅野春雄さんの研究でカイコの卵が一躍有名になった。秋にカイコの卵が産みつけられると、卵の中の栄養分であるグリコーゲンが、なぜかどんどん減っていって、一週間ほどすると完全になくなってしまう。いったいどこへいってしまったのかと調べてみると、グリコーゲンはグリセリンとソルビトールという物質に分解してしまっていることがわかった。ところが、この二つの物質のコンゴウブツは、強力な不凍液なのである。こういう状態になった卵は、ちょっとやそっとの寒さでは凍ったりすることはない。けれどこの不凍液ができるためには、皮肉なことに秋の暖かさが必要なのである。やがて冬になってほんとうに寒くなると、グリセリンとソルビトールは結合して再びグリコーゲンに戻っていく。そして冬の寒さが二か月もつづくと、卵の中には元どおりグリコーゲンができ上がっている。このグリコーゲン再合成には、かなり長期にわたる冬の寒さがなくてはならない。暖冬は、カイコの卵には迷惑なのだ。そして暖かい春になると、このグリコーゲンを栄養分にして、卵の中でカイコの幼虫が育ち、孵ってくることになる。

冬の寒さを乗り切るには［　Ⅰ　］が必要で、春に卵が孵るには［　Ⅱ　］がなくてはならないのだ。

年ごとに暖かさも寒さもちがう。だが、このようなプログラムのおかげで、虫たちは年ごとの変動に耐えていくのである。

（日高敏隆「冬を越す」による）

平成二十二年度　灘中学校入学試験問題　国語　二日目　五枚のうちの二枚目

問一　――線部A～Hのカタカナを漢字に改めなさい。

問二　――線部X～Zの意味として最も適当なものを、それぞれア～エから選び、記号で答えなさい。

X「つかのまの」（ア 永遠の　イ その時々の　ウ ほんのしばらくの　エ ささやかな）

Y「てんでに」（ア めいめいに　イ 群れをなして　ウ ぽつりぽつりと　エ 連続して）

Z「一躍」（ア 非常に　イ いっきに　ウ 思いがけず　エ かつてないほど）

問三　――線部1「毎年、毎年が何らかの形で異常であり」とありますが、この内容を具体的にわかりやすく言っている一文を問題文中からぬき出し、始めの五字で答えなさい。

問四　――線部2「冬を越す虫たちは、単に暖かい場所を求めているわけではない」に関する次の説明文の、[A]・[B]に入れるのに適当な言葉を、それぞれ問題文中からぬき出して答えなさい。

たとえ暖かくても、[A]所や、[B]所は避けなければならない。

問五　――線部3について、次のA・Bの問いに答えなさい。

A「驚くほど単純に」とは、どういうことをさしているのですか。問題文の内容に沿って具体的に答えなさい。

B「妥当」は「適切でふさわしい」の意味ですが、なぜ「きわめて妥当」なのですか。理由を答えなさい。

問六　――線部4「皮肉なことに」とありますが、どういう点が「皮肉」なのですか。答えなさい。

問七　[Ⅰ]・[Ⅱ]に入れるのに適当な語句を、それぞれ次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア 秋の寒さ　イ 秋の暖かさ　ウ 冬の寒さ　エ 冬の暖かさ

二　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

子どもというのはどのくらい大人なんだろう。なんにもわかってなさそうな顔をしているが、しかし、いろんなことをわかっているものだ。ともあれ、私はちゃんとわかっていた。幼稚園児のとき、私は本当になんにもできない子どもで、字も読めなけりゃはさみも使えない。何か話しかけられてもすぐに答えられないし、どこかが痛くても痛いとも言えない。おしっこという一言が言えなくて、結果、我慢できずにいつもおもらし。廊下の隅で、替え用のパンツに着替えさせてもらう。濡れたパンツはビニール袋に入れられて、持って帰るよう渡される。

ほかの子ができることを自分はなぜかできない、ということを私はわかっていた。話しかけても黙っているから、話しかけた子が困っているのが、もう二度と話しかけてくれないのが、わかっていた。ちょっと困った子だと、先生が思っていることをわかっていた。替え用パンツはほとんど自分専用だということもわかっていたし、ビニール袋に詰められた濡れパンツの情けなさもわかっていた。

全部わかっているから、1私は絶望した。幼稚園児の絶望なんてたいしたことないと思うかもしれないが、世界が狭いぶん、絶望の色合いはうんと濃いのだ。だってそこしかいるところがないんだから。

私って、きっとずっとこんな感じなんだろうなあ、と、大人語に変換すればそんなようなことを、私は漠然と思っていた。だれともうまく話せなくて、だから友達もできなくて、みんなのできることはずっとできないで、なんだか格好悪くて、先生や親を困らせて、楽しいと思うようなことがあんまりない。そういう場所で、こういう具合に私はずっと生きていくんだろうなあ。いやだけど、ほかにどうしようもないもんなあ。幼稚園児の私は大人語をまだ持っていなかったので、ただぼんやりと重暗い、きゅうくつな気分だけを抱いていた。

ここを出ていったって世界はさほど変わらんだろうとわかっていたから、卒園式も、晴れがましい気分ではなかった。いつもよりきれいな服を着せられ、列のうしろについて、みんなが動けば遅れないように（でも遅れるが）動き、いつもとはまるでちがう一日を、なんとかやりすごした。

まだ空気の冷たい春のはじめ、もはや幼稚園児でもなく、まだ小学生でもない私のもとに、いろんなものが続々とやってきた。学習机、真新しい体操服、運動靴、お道具箱、教科書、ノート、筆箱、鉛筆。そのすべてに母は名前を書いたり縫いつけたりした。

小学生というものは、なんとまあ所有物が多いんだろうと感心した。これ全部私のものになるんだと、子ども部屋に散らばった、真新しいそれぞれを見て私は思った。やっぱり晴れがましい気分にはなれず、どちらかというと気が重かった。

汚れたらどうする。忘れたらどうする。なくしたらどうする。私はきっと、おそれることの全部をやらかすだろう。汚して、忘れて、最後にはなくすだろう。私の名前の書かれたさらっぴんのこれらは、みなひとつずつ、世界の隙間に落っこちて、永遠に戻ってこないだろう。

そんなある日、大きな箱が届いた。きちんと包装されて、リボンがついていた。おばあちゃんからだ、と母親は言った。

もう慣れっこになっていた重苦しい気分で、私は包装紙を破いた。汚すかもしれない、忘れるかもしれない、なくすかもしれない所有物が、またきっと出てくるにちがいない。

2出てきたのはランドセルだった。赤くつややかに光っていた。やけに馬鹿でかく見えた。体をうんと折り曲げれば、私自身がすっぽり入れそうだった。下部に留め金があって、開けると、かちゃりと小気味いい音がした。ふたをべろりと持ち上げてなかをのぞいた。ベージュの空洞が

あった。顔をつっこむと、不思議なにおいがした。くさいというわけではないけれど特別いいにおいでもない。なんだかなつかしいようなにおい。大人語で言えば革のにおいだが、嗅いだことのないそれは、幼稚園児でも小学生でもない私にとって、未来のにおいに思えた。

足をルの字に折って座り、膝にランドセルをのせて、私はぼんやりと、なんにも入っていないなかを眺め続けた。真四角の空洞。それはあいかわらず馬鹿でかく見え、なんだって入るように見えた。こんなものを背負って毎日学校にいくのか。こんなに馬鹿でかけりゃ、なくさなくてすむかもな。

私はふと思いたって、大切にしているぬいぐるみのルルをランドセルに押しこんでみた。入った。しかも、まだまだ余裕がある。気に入りの絵本を入れてみた。幼稚園で使っていた色鉛筆を入れてみた。台所に走っていって、漫画の絵のついた水筒を持ってきて入れてみた。なんだって入った。石ころ。パラソルチョコレート。ひみつのアッコちゃんのコンパクト。スヌーピーのハンカチ。サクマドロップ。入る、入る。来年はもう無理ねと母が言っていた水着。[3]見あたらないと絶望がいや増す水玉の靴下。

「あらやあだ、家出用の鞄じゃないのよ、それは。」

ランドセルに身のまわりのものを全部つっこもうとしている私に気がついて、母は声をあげて笑った。そんなことわかってる。小学校は、どんなところだか知らないけれど、石ころやルルを持っていくようなところじゃないってことくらい、わかってる。でもね、でもおかあさん。[4]なんかだいじょうぶな気がしてきた。だってこの鞄、なんだって入っちゃうんだもん。

小学校が絶望的な場所だったら、そこでまたもや自分に絶望したら、私はこのランドセルに気に入りのものを全部詰めて、それでそこから逃げていこう。ハンカチや水筒の飛び出た赤いランドセルを見おろして、私はそうひらめいたのだった。どこか、絶望しないでいられる場所をさがして、たったひとり、全財産を持って、逃げよう。そうだそうだ、そうしよう。もうだいじょうぶ。

私の全財産は、ルルでありハンカチであり水筒であり、チョコでありキャラメルでありキャンディであり、石ころであり家族で撮った写真であり、さわるとガチョウが金になる絵本だった。それだけで生き延びられると私は思っていた。ひとりで、どこかで、大人になるまで生きていけると。

全財産を押しこんだランドセルにふたをして（かちゃりとまた留め金が鳴った）、両腕を肩バンドに差し入れて背負い、立ち上がった。背負った全財産はあまりにも重く、私はよろよろとうしろによろけた。それを見て母がまた笑った。

その夜、父が帰ってくると、母はまた私にランドセルを背負わせて、父とともに笑った。カメラを向けたりもした。自分が笑われているのに私はなぜか怒りも泣きもしないで、なんだかおんなじように愉快な気持ちになって、わざとよろよろしてみせて、それでいっしょに笑った。おばあちゃんに電話をかけてお礼を言うときも、私はずっと笑っていた。

その四月に私は小学生になった。[5]「ランドセルに背負われてる。」と母に笑われながら、毎日、赤いランドセルを背負って小学校を目指した。

ひょっとしたら赤いランドセルは、もしくは奇妙なにおいのする四角い空洞は、私にとって扉[6]だったのかもしれない。なぜなら私はかつてのように絶望しなくなったから。おはようと言われればおはようと返せばいい。おかしいことがあったら声を出して笑えばいい。できないことがあったらだれかに助けてと言えばいい。それでももし、世界が依然として私に背を向けるなら、この空洞に全財産を詰めてさっさとどこかへ逃げ出せばいい。

ランドセルからつやが失われ、あちこちにかすり傷ができ、バンドに腕を通すのがきゅうくつに感じられるころには、私はごくふつうの、どこにでもいる小学生になっていた。

誕生日パーティに呼ばれ、数人の友達と秘密を共有し、秘密基地を作り、先生に怒られ、つうしんぼに一喜一憂する、ごくふつうの小学生。全財産を背負って逃げようという必死の覚悟もすっかり忘れ、ただただ、一日一日をせわしなく過ごす。かつて影のようにひっついていた絶望という言葉は、親にばれないように捨ててしまった赤点のテスト用紙ほどに、意味のないものになった。

（角田光代『ランドセル』による）

問一　――線部1「私は絶望した」とありますが、それはなぜですか。理由を三十字以内で答えなさい。

問二　――線部2「出てきたのはランドセルだった」とありますが、大きな箱の中からランドセルが出てきた前後の「私」の気持ちとして、最も適当なものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

ア　箱の中にはランドセルが入っているかもしれないと、「私」はわくわくしていた。
イ　箱の中に入っているのがランドセルであることを知るまで、「私」は不安だった。
ウ　箱の中からランドセルが出てくると、「私」はうれしくてたまらなかった。
エ　箱の中からランドセルが出てくると、「私」はがっかりした。
オ　箱の中に入っているのがランドセルであることがわかると、「私」の気持ちはますます暗くなっていった。

問三　――線部3「見あたらないと絶望がいや増す水玉の靴下」とありますが、「絶望がいや増す」のはなぜですか。理由を答えなさい。

問四　――線部4「なんかだいじょうぶな気がしてきた」のはなぜですか。理由を答えなさい。

問五　――線部5「ランドセルに背負われてる」とありますが、これはどのような状態をいったものですか。答えなさい。

問六　――線部6「扉」は、ここではどのような意味で使われていますか。問題文の内容に沿って具体的に答えなさい。

三　次の詩をよく読んで、下の問いに答えなさい。

海

阪本越郎（さかもとえつろう）

今日も晴れて
[1]白い馬たちがあばれています
馬たちは白いたてがみをふり
砂をふみつけて
高いひづめの音を
ひびかせています。

海よ　ぼくはおわかれします
ひと夏じゅう
ぼくがはだかでのって遊んだ
白い馬たちよ
ぼくをからだごと運んで
砂の上にたたきつけた
たくましい馬たちよ。

赤いカンナの花ばたけは
風にあらされました
松林のかげの小屋に
[2]銀バスはもう子どもたちを
運んで来ません。

海よ　ぼくはおわかれします
白い馬たちがあばれている
さびしい海べには
もうあの馬にのる子どもは
ひとりもいません
[3]貝がらのちらかった砂の上に
ほうせんかの種がこぼれています。

海よ　さようなら　さようなら
また来年夏まで　さようなら
銀バスのまどからふりかえると
[4]かもめが白いハンカチをふっています
青い目をした海よ
かなしそうな白い馬たちよ。

問一　――線部1「白い馬たちがあばれています」とありますが、これは何のどのような様子をたとえた表現ですか。答えなさい。

問二　――線部2「銀バスはもう子どもたちを／運んで来ません」とありますが、それはなぜですか。理由を答えなさい。

問三　――線部3「貝がらの～こぼれています」とありますが、ここで作者は何をえがこうとしているのですか。答えなさい。

問四　――線部4「かもめが白いハンカチをふっています」とありますが、「ぼく」は何をどのように感じたのですか。次の説明文の［　A　］・［　B　］に入れるのに適当な言葉を、それぞれ指定された字数以内で答えなさい。

かもめが［A（十字以内）］様子を見て、ぼくは［B（十五字以内）］ように感じた。

問五　この詩全体を通じ、「ぼく」はどのようなことを感じていますか。答えなさい。

受験番号

平成二十二年度　灘中学校入学試験問題　国語　二日目　五枚のうちの五枚目

◎解答に字数制限のある場合、句読点などの記号も字数に数えます。

一

問七	問六	問五		問四		問三	問二	問一			
Ⅰ		B	A	B	A		X	G	E	C	A
Ⅱ							Y				
							Z	H	F	D	B

二

問六	問五	問四	問三	問二	問一		

三

問五	問四			問三	問二	問一
	B		A			